

臼杵磨崖仏・修復四十年

別府大学教授 賀川光夫

大分県の各地に散在する磨崖仏は七十六カ所、総数四百ともいわれるが確かな数は未だ分からない。磨崖仏の所在地と、仏体の数からみて全国の数にあたるという人もいるくらい多い。大分県の磨崖仏を「豊後磨崖仏」というが、豊前地方にも散在し、県全域に分布しているから、大分県は磨崖仏の県といってもよい。特に臼杵石仏は東アジア屈指の磨崖仏としてこれまで多くの学者によって研究がすすめられている。

太平洋戦争終了後、昭和二十六年六月、臼杵磨崖仏を訪れた。私の眼にはその時の石仏の周辺の惨澹たる状況がいまも焼き付いている。ようやく人の通れるだけの道があったが、磨崖仏岩盤の亀裂をとおして流れ落ちる水と山からの湧き水とで湿り、夏草が生い茂っていた。その中に、「過去七仏」（ホキ二群一龕・九品彌陀）と書いた標柱が根元を腐らせて立っていた。二体の如来の顔は残されていたが、大部分の顔はなく、上と下からの夏草と蒿に覆われていた。さらに無惨であったのはホキ一群二龕の阿彌陀三尊の本尊で岩盤からずり落ち、大きく傾いていた。このまま放置すれば全壊の恐れがあった。

ホキ一群の諸仏は痛みがひどく、如来の顔はほとんどが落ちて、放置されていた。二群一龕如来三尊の中央阿彌陀の顔は右半分が無く、奇妙な風貌のみ仏にみえた。流れ落ちる水垢に汚れたホキ石仏群の有様は、この地が阿彌陀浄土と

は思えない状態であった。

古園石仏群は、さらに無惨で、石仏の胸まで夏草が生い茂り、大日如来を含む五体（五智如来）の顔は落下して散乱していた。十三体の仏像のうち満足に顔まで整っていたのは、菩薩四体と右側（向かって）の多門天像の五体であったが、それらも指でかく押すだけで薄い煎餅状に剥離してしまふほど風化が進んでいた。戦後の臼杵磨崖仏は大正十一年、京都大学の調査時期と比べても荒廃は一段と進んでいるようにみえた。

戦後の石仏について当時大分合同新聞社カメラマンの中野正義氏の撮影による文化映画（文部省推薦）がある。撮影された写真は惨澹たる臼杵磨崖仏で、筆者はこの「滅びの美」に対して『美の哀史』という題で当時の石仏を解説した。昭和三十年破損した大日如来像の破片を実測してムシピンで繋ぎ合わせ、完全な大日如来像を完成させた。これが図でみる最初の大日如来像の復元であった。それから平成五年の復元完成までの四十年間、文化庁記念物課・美術工芸課と臼杵市の長期にわたる調査研究、修理復元工事が行われた。四十年という年輪は失敗の許されない修復にかけた関係者の努力の集積の年月であった。この間、修理に必要な研究データにもとづいて学術的に検討をくわえ、その成果をひとつひとつ投入していった。かくして特別史跡は現状変更することなく岩盤の補強が行われ、美術として価値の高い仏体の修理を行うことができた。およそこれまでに例をみない学術的效果を高め、修理の完成をみたことは一貫して修理事業の原点である文化遺産に対して謙虚な姿勢を貫いたことによる成果とみてよい。